
願ったひと

yoshina

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願ったひと

【Nコード】
N4658F

【作者名】
yoshina

【あらすじ】
もう日は過ぎましたが、突発的に高佐で十一月七日ネタを書きました。短めで、しみじみシリアス。

「ねえ、爆死する時ってどんな感じなのかしら」

「……突然物騒な話題ですねえ」

捜査一課から一番近くにある自販機コーナーのベンチに座って、佐藤はぼつりと呟いた。手にはホットココア。最近急に冷え込んできて、彼女がよく飲むようになったものだ。

対する高木は、彼女と背中合わせになる形で反対側のベンチに座っている。先にここに来ていたのは彼女だ。そこに後から別の仕事を終えた彼女がふらりとやって来て、隣ではなく反対側に座った。そして暫く捜査の話などをし、不意に出てきた会話がこれである。

彼は物騒とは言いつつ、佐藤の呟きにさほど驚きはしていない。微糖の缶コーヒーを一口飲む。

「やっぱり痛いのかしら」

「さあ、でも爆死って一瞬だと言いますよね」

「でも一瞬ということは、少しでも時間はあるってことじゃない？」

「それは……そうですね」

深夜の自販機コーナーで、ほぼ同時にそれぞれの飲み物を口に入れる。そしてやはり同時に息を吐いた。

しかし、次の行動は別だった。佐藤は手元の缶コーヒーを見下ろし、高木は天井を見上げた。

「そういえば僕、以前爆死しかけたことあるんですけど」

彼は傍から聞けばとんでもないことを何気なく言った。東都タワーで起こった爆破未遂事件。それに巻き込まれた経験のある彼は、

しみじみと語る。

「あれはー……肝を冷やしましたねー……」

当時のことを思い出し、苦笑いを浮かべた。今だからこそ苦笑いで済むが、その時の心境はすぐに言い表せるものではない。

「やっぱり怖かった？」

そんな背後の彼に、佐藤は視線向けた。

「怖い、というよりホントにヒヤツとしたんですよ」

高木も四十五度首を右に回して、彼女に目を遣る。その気配を察して、今度は佐藤が上半身を左へひねった。彼の横顔を伺うような形になる。

「死ぬんだな、って思った？」

その問いに、彼はすぐには答えない。その代わり、手に持っていた缶をベンチに置いて立ち上がった。そしてベンチの裏を回り込み、佐藤の目の前にしゃがみこんだ。

佐藤は一瞬何のつもりなのかと、首をかしげる。しかし自分の膝ぐらいいる彼と視線を合わせるべく、姿勢を元に戻した。

素直に見下ろす彼女の目を見つめ、彼は口を開いた。

「それとも思いはしましたけど、最終的には佐藤さんのことを考えていたような気がします」

佐藤が少しだけ目を大きくする。一瞬泣くかのように目を震わせ

たが、すぐに破顔した。

触れればろぼろと崩れていきそうな、砂の城。

「それって口説き文句？ それとも気遣い？」

彼は佐藤のそれとは違い、暖かい色を持った笑顔を見せる。

「僕がそんな器用なことできると思いますか？」

彼女はおかしそうに噴き出して、顔を横に振った。次に、右手でベンチに座る自分の側をぽんぽんと叩いた。ここに座って、と言うように。

恋人のささやかな願いに、高木は大人しくご希望の腰を下ろす。

いつもなら、二人でこういった状態になれば、彼女が顔を彼の肩にもたれかけさせてくる。しかし今日は違っていた。

佐藤はまっすぐ前を向いたまま、彼と触れるか否かの距離を保った。暫くの間、その距離が無言で続く。

自販機の電子音だけがコーナーに響き、高木もぼんやりと目の前の麻葉撲滅ポスターを眺めた。

あまりにも静かだったので、彼女のつばを飲み込む音が彼には聞こえた。そして壁にかけてある時計が十二を指した。十一月七日0時0分。

それを見計らっていたかのように、佐藤が、先ほどの呟きよりも更にかすれるような声で言った。

「きっと、松田君はほんとにほんとの最期の時、違う人のこと考えてたのよ」

高木は、彼女自身ではなく手元のココアを見た。

「萩原刑事、ですか」

人伝えに聞いた殉職刑事の名を出す。それに対しては、彼女はゆっくりと首をかしげた。

「それはわからないわ。でも、絶対に私じゃなかったことだけは確かだと思うの」

『追伸 あんたのことわりと好きだったぜ』そんなメールを爆破で死ぬ直前に受け取りはしたが、それでも佐藤は何かしらの確信を持っているようだった。捜査で事実を説明するときのような、淡々とした口調。

一方の高木はそのメールまでは知らない。しかし少しだけ考えた後優しい声で問いかける。

「寂しかったですか？」

「——ううん」

佐藤は目を伏せる。

「それに、彼が私のことを考えるなんて絶対にありえないことなの」「そうですか」

そこで彼女は、やっといつものように彼の肩に顔をもたれかけさせてきた。目を閉じて、じっと彼の暖かみを感じて。

そんな恋人の仕草を、高木は静かに受け止める。肩を抱きもせず、声もかけず。ただ居るだけの存在として。彼女に今必要なことはそういうことなのだと、彼はわかっていた。

二人の背後に置かれた彼のコーヒーは、すっかり冷めてしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4658f/>

願ったひと

2010年10月12日01時47分発行